

碧海台地で生きる人々の過去・現在・未来を見つめる

安祥文化のさと 安城市歴史博物館

安城市立安城西中学校長 松永博司

日本史の黎明期において三河の中心であった安城
明治用水開削以降の「日本デンマーク」としての発展は教育が礎となる
先達が明らかにしてきたこの地域の歴史を、ここで振り返る



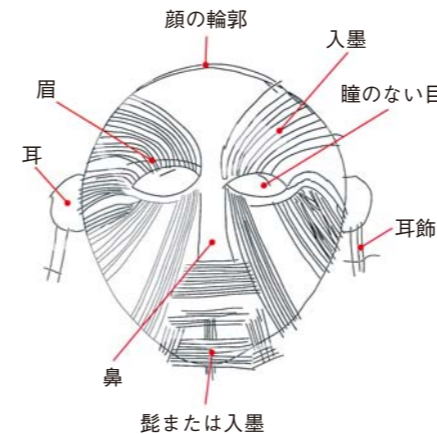
安城市歴史博物館 全景

安城市歴史博物館は、安城市域の歴史を伝える施設として、平成3年2月に開館した。立地として選ばれたのは、徳川家康の祖父である松平清康までの安城松平四代が50年間居城としていた安城城（安祥城）を含む安祥城址公園の一角である。安城市民ギャラリー・

安城市埋蔵文化財センターも隣接し、歴史調査・研究や芸術分野における市民の交流拠点でもある。公園と各施設、安祥公民館を含めたこの一帯は総称して「安祥文化のさと」と名付けられ、歴史と美術を気軽に楽しめる文化ゾーンとして、市民に親しまれている。



人面文壺形土器(上)と入墨のある人面(下)
(安城市歴史博物館 蔵)



重要文化財「人面文壺形土器」
当博物館で注目すべきものは、「人面文壺形土器」(国指定重要文化財)である。昭和52年に亀塚遺跡(弥生時代終末期)で、火を使用した痕跡周辺から出土した。土器接合作業で人面文が描かれていることが判明し、腫のない目や入墨と思われる顔に書かれた模様が、「魏志倭人伝」にある「男子無大小皆黥面文身」(男性は皆、体や顔に入墨をしている)という記述と一致し、当時の風俗を明らかにする弥生時代の一級資料として全国的に報道された。出土地一帯は「鹿乗川流域遺跡群」と呼ばれる広大な遺跡群があり、県最大級の前方後方墳「二子古墳」(国指定史跡)等を含んだ矢作川流域最古級

「日本デンマーク」と称される努力
明治用水開削は安城市発展の礎である。用水立案者の都築弥厚は40代に志を立て、夢を持ち続けた。明治用水会館「水のかんきょう学習館」に詳細な展示がされているほか、その姿は現在の本市の教育方針に記され、漫画化され市内小中学生にも配布された。
しかし、その後「日本丁抹(デンマーク)」と称する農業先進地にまで高めたのは人々の不断の努力であることはあまり知られていない。やせた土地の改良に通水後も苦勞した人々。しかし、鉄道敷設と安城駅の設置、愛知県立農林学校の開校や愛知県農事試験場本場の開場、初代校長山崎延吉の指

導や農事試験場岩槻信治等の研究から多くの人々が学び、活躍を始めたのである。

折しも世間は第一次世界大戦後の不況で、農村は特に苦しんでいた。識者は小国ながら敗戦から農業国家へ復活したデンマークに着目し、組合方式の確立や酪農・複合した農業への転換、教育の充実に着目した。安城では、これまでの教育・研究が実を結び始め、

書振興を図る農業図書館の建設など、農業を超えた人や社会の在り方を体現できる農村づくりに取り組んだ。これが「農政研究」日本の丁抹号に取り上げられ、安城の名が日本に広まったのである。人々の不断の努力と、その根底の「教育」の存在があることを私たちは決して忘れてはいけない。
「『日本デンマーク』は一日にしてならず。」そう感じさせるのが、本館の「日本デンマーク」の展示である。

板倉農場を代表とする、米麦作に養蚕や園芸、畜産等を行う多角形農業の展開や、碧海郡内各産業組合が結集した丸碧(碧海郡購買販売組合連合会)の鶏卵等の共同販売や肥料等の共同購入が進んだ。丸碧印の三河西瓜は鉄道で全国に運ばれて駅周辺は栄え、農村医療改善のための病院建設や、農民の読

生涯にわたる 歴史に親しむ心を育てる

本館には本市ならではの博物館の活用や取り組みがあることも特徴である。一つ目は、学校への歴史教育振興である。文化振興課が主催する安城市小中学校歴史賞作品展「歴史のひろば」では、郷土史研究に取り組む小中学生に光をあて、その成果を披露する場を設けている。このような、郷土史研究に特化した本展は、全国的にも珍しい。



江戸図屏風を用いた授業風景 (安城市歴史博物館にて)

同様の取り組みとして、安城市小中学校科学賞作品展「かがくのひろば」については、学校教育課が主催している。また、博物館主催で「夏休み自由研究相談会」を設け、学芸員が研究のアドバイスをすることで歴史への関心を高めている。このような取り組みも国立歴史民俗博物館等、全国で数例しかなく、注目を集めている。

さらに、小中学生の見学学習や出前授業を行うほか、学校の授業にも積極的に関わっている。過去には堀内貝塚出土人骨を用いた縄文時代の授業や、特別展で展示された江戸図屏風(国立

歴史民俗博物館所蔵)を用いた江戸時代の学習を展開するなど、博学連携体制が整えられている。
二つ目は生涯学習の視点からの歴史研究の振興である。本市は歴史研究市民団体が多く設立され、歴史博物館開館は待望の施設の開館であった。毎年開催される「安祥文化のさとまつり」では、各団体の取り組みが紹介され、精力的な活動が行われている。その活動支援にも多くの教員出身者があり、歴史を通して地域を愛する姿にあふれている。
郷土を知ることで、郷土を愛し、未来志向の考えが生まれる。この姿勢を生み出す知的生産の文化的拠点として、今後も大いに活用していただきたい。



山崎延吉初代校長の講話風景
(安城市歴史博物館)



「農政研究」日本の丁抹号 表紙
大正15年5月発行



【安城市歴史博物館】

安城市安城町城堀30
Tel.0566-77-6655 月曜日休館

※現在耐震工事のため令和2年3月末日まで閉館。
(安城市民ギャラリーは開館)

